

## 秋山遭難（一日だけの冬の訪れ）

三年前の十月、体育の日を前に秋一番の寒波が襲来した立山連峰で中高年の登山パーティが紅葉見物の山で遭難した。標高三千メートル付近の稜線を縦走中、寒冷前線の通過とともに天気が急変しミゾレ混じりの風雪に見舞われて立ち往生し次々と遭難してしまった。稜線付近では風速十数メートル、気温が氷点下に下がり体感気温では氷点下十五度以下まさに冬山並みの世界だった。下界の爽やかな秋の季節では想像できない「一日だけの冬の訪れ」が紅葉登山を暗転させた。

最近は中高年の山歩きが盛んとなりそれに連れて遭難も確実に増えている。今年のゴルデンウィークではこの二十年間で最悪の春山遭難をだしたが、そのなかで特に中高年の遭難が激増していた。交通が便利となり立山アルペンルートのように標高一千五百メートル室堂平まで車で登れ、気軽に三千メートル級の高度が稼げるようになり軽装で登山してしまうことも遭難増の一因に上げられている。

筆者も稜線上で秋特有の天候の急変に見舞われ、気温二、三度で冷たい雨が吹きつける難行を経験したことがあるが、汗で濡れた肌着が強い風で冷たく加えて吹き上げる風雨で濡れて想像以上に体力を消耗する。風速が一メートル強くなると体感温度が一度下がり、風で寒さが加わり、稜線での行動は一層危険となる。とくに中高年登山は自分で考えている以上に体力の消耗が激しく、注意力も散漫となるので滑落事故やちょっとした所で捻挫や骨折などケガをし易く、「昔は…」が禁句となる。

冬の訪れの先触れとなる初冠雪の頃の紅葉が一番美しく鮮やかとなる。北国の二千メートル級の山々ではいまを盛りに鮮やかな錦屏風を広げており、いよいよ紅葉登山のシーズンが日本列島を南下した。秋の山は急変しやすくそこには「一日だけの冬の訪れ」があるので注意が肝要。